

## ヨハネによる福音書20章1-18節 「見て、信じる」

### 1A 石が取り除けられた墓 1-2

### 2A 墓の中を見る二人の弟子 3-10

### 3A イエスにしがみつクマリア 11-18

#### 本文

ヨハネによる福音書 20 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはついに、主が十字架に付けられたところまで読みました。今日は、一節ずつ、前半と後半を見ていきたいと思います。今朝は、1-18 節まで見ていきます。主がよみがえられたことです。使徒パウロは、主がよみがえられたという福音に、私たちは立っていると書いています（I コリ 15:1）。

### 1A 石が取り除けられた墓 1-2

<sup>1</sup> さて、週の初めの日、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓にやって来て、墓から石が取り除けられているのを見た。<sup>2</sup> それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛されたもう一人の弟子のところに行って、こう言った。「だれかが墓から主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私たちには分かりません。」

「週の初めの日」とあります。19 章では、過越の備えの日があって、その次の安息日が「大いなる日」とあり、人々は必ず安息しなければいけませんでした。十字架に付けられた息を引き取られたイエス様の遺体を、アリマタヤのヨセフが取り降ろし、ニコデモがその埋葬に必要な没薬と沈香を携えてきました。安息日の始まる直前、日没前に、ヨセフの新しく造った墓にイエス様を葬りました。そして、安息日を迎えます。それから、土曜日の晩には安息日が終わっています。それが、「週の初めの日」で、日曜日です。もちろん、外は暗いですから、何もできません。そこで、「朝早くまだ暗いうちに」とあります。夜も明けたかどうかという、まだ薄暗い時に、「マグダラのマリアは墓にやって来て」ということです。

聖書では、七は完全数で、神の数字です。七日目の安息日は、天地の創造を完成された神が、休まれたことを記念する時です。けれども、その次、八は「新しい始まり」を意味しています。ノアの時代の洪水、その家族の人数は八名でした。八人が箱舟に入り、洪水の後に新しい世界になってから出てきました。同じように、すべての罪が十字架の上で裁かれ、そのことが行われたことを明らかにするために、神は主イエスを死者の中からよみがえらせます。

そして、ヨハネは、「マグダラのマリアは墓にやって来て」と、彼女が第一目撃者であることを記しています。他の箇所では、女たちが墓にやってきたことが書かれています。おそらく、マグダラのマ

リアは、他の女たちと共に墓に向かいましたが、彼女たちよりも足早に歩き、それで墓に最初に着いた時は、一人で到着したと考えられます。けれども、石が取り除けられていて、そこに遺体がないのを知って、ペテロと、「イエスが愛されたもう一人の弟子」すなわちヨハネのところに行って、そのことを告げたと考えられます。マグダラのマリアが出て行った後に、他の女たちが到着しました。

マグダラのマリアは、とても特別な人です。マグダラというユダヤ人の町出身の女ですが、そこは、ナザレなど、他のガリラヤ地方からガリラヤ湖畔に入ってくる時に、その入り口になっている町で、今もミグダルという町があります。そこに遺跡が発掘されて、イエス様の時代の時のシナゴグや漁業の町だったので、その市場の跡が発掘されています。彼女について、ルカはこう記しています。「8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア」七つの悪霊を追い出された、とありますから、彼女のイエス様への愛は、特別なものです。彼女の人生は、すべてイエス様による解放から新たに始まったと言っても過言ではありません。不道德な女で、イエス様の足を涙で濡らした女がいましたが、イエス様は、「ルカ 7:47 この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。」と言われました。それと同じです、彼女にとってイエス様がすべてでした。

そして、十字架の光景をずっと見ていた女たちの一人に彼女がいました。マルコは、「15:47 マグダラのマリアとヨセの母マリアは、イエスがどこに納められるか、よく見ていた。」と記しています。彼女が主が死なれたことの最後の目撃者の一人であり、そして、よく見ていたその場所で、石がとりのけられていた墓を見た、初めの目撃者でもあったのです。それだけ主を愛していました。

しかし、その彼女が、墓から離れ、「だれかが墓から主を取って行きました。」とペテロとヨハネに告げています。彼女は、墓が空であることを見たのですが、それを誰かが取っていったとみなしたのです。ここで、彼女のイエス様への愛が伝わります、「主を取って行きました」と言っていますね。彼女にとって、イエス様が単なる預言者でも、誰でもなく、主ご自身でした。ところが、彼女は、誰かに遺体が取られてしまったとみなしたのです。

ここで大事な言葉が、1節です。「見た。」とありますね。このギリシア語がブレポー(βλέπω)です。これは、視界に入るという意味での「見る」であり、「見えた」と言ってもよい言葉です。よく本文を見ると、「墓から石が取りのけられているのを見た」とあるので、中を覗かずに、主の体がそこにいるのを確認せずに、そのまま出て行ったのかもしれませんが。結果として、体はなかったのですが、確かめずにそのまま伝えに行った可能性もあります。使徒の働きで、牢屋にいるペテロが解放されるために、熱心に祈りを捧げていたところ、御使いの助けによってペテロが牢獄から出てきて、その集まっている家に来て、門の戸を叩いたら、召使いがペテロの声を聞くと、「使徒 12:14 喜びのあまり門を開けもせずにおくに駆け込み、ペテロが門の前に立っているのを知らせた。」とあります。これも、あまり確かめなくて体だけが動いたのですが、マリアはそのように、ただ見ただけで反応

してしまっています。

マグダラのマリアは、主を愛していますが、確かな証拠ではないところで愛を示しているという特徴がありますね。それぞれの弟子たちが、復活のイエス様に会って、信仰が確かなものとなりますが、彼女のように、主への愛に識別力が与えられることによって成長が必要であるときがあります。パウロは、コロサイの人たちのために、「1:9 あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされますように。」と祈りました。

## **2A 墓の中を見る二人の弟子 3-10**

<sup>3</sup> そこで、ペテロともう一人の弟子は外に出て、墓へ行った。<sup>4</sup> 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。

ヨハネは、いつも一緒に動いていたペテロと共に、このようにして一緒に墓に走って行きました。彼とペテロは、使徒の働きにおいて、聖霊が降ってから、共に行動している場面が多く出てきます。ヨハネは、ペテロよりも早く到着したことを敢えて書いていますが、ヨハネは、伝承によれば十二弟子の中で最も若かったと言われています。90年代まで生きていて、この福音書を書いているのですから、20歳であったとしても、80歳は超えています。墓までは結構な距離で、ペテロは息切れしているけれども、ヨハネはペースを落とさず走れたのではないかと思います。

<sup>5</sup> そして、身をかがめると、亜麻布が置いてあるのが見えたが、中に入らなかった。

ヨハネが到着して、初めにしたことは、「身をかがめる」ことです。一世紀のローマ時代のユダヤ人の墓の跡が、イスラエルには残っています。それらは、墓の中に入るための穴は、かなり低いです。小さな子でも、かがまないと入れないぐらいのものもあります。ですから、身をかがめたのです。すると、「亜麻布が置いてあるのが見えた」とあります。ここの「見えた」は、先のマグダラのマリアが、石がとりのけられているのを「見た」とあった、ブレポーが使われています。ヨハネは、確かにマグダラのマリアが行った通りだと確認したのでしょう。亜麻布が置いてあるのは見えたので、そこに遺体はないことは分かりました。

けれども、中には入っていません。亜麻布が置いてあることから、その意味は何か？と思い巡らしていたのかもしれないし、ペテロがリーダーのようになっていたので、彼が来るのを待っていた可能性もあります。先のマグダラのマリアとは対照的です。見えているものを、考えていた、思い巡らしていたのです。

<sup>6</sup> 彼に続いてシモン・ペテロも来て、墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。<sup>7</sup> イエスの頭を包んでいた布は亜麻布と一緒にではなく、離れたところに丸めてあった。

シモン・ペテロが来て、彼は墓に入りました。ペテロは、何でも直情的に動き、行動に移す性格であることは、私たちはこれまで見ていますね。

そして彼が入ると、はっきりすることがありました。「これは、体が運ばれたのではない。」ということです。亜麻布が置いてあるのですが、イエス様の頭を包んでいた布が亜麻布と一緒ににはなかったということ。これは、かつてラザロが、生き返ってから、布をほどいてあげなさいとイエス様が言われましたが、そういったことをした形跡がない、ということです。そのまま体が、布から出て行ったかのような状況です。

ペテロも、ここで「見た」という行動を行っています。これはセオーレオー(θεωρέω)というギリシア語で、「よく調べる」ということです。亜麻布が見えただけでもペテロは満足せず、じっくりと、どうなっているのかを近づいて見たということです。じっくりと見ているのですが、それでもその意味するところは分からず、ただ驚いていたことでしょう。

ペテロのこの熱心さは、イエス様を知りたいという思いから発しているのであり、すばらしいことです。けれども、その信仰が、イエス様について知るようになっていくけれども、イエス様を知っていることには必ずしもならない、ということにならないでしょうか？ 聖書を熱心に読み、聖書に関する本、神学についての本も読み始めるかもしれません。そういったことを知ることは益になります。しかし、時に多くを調べて見ても、ペテロのようにその意味が分からない、ということは多くあります。

<sup>8</sup> そのとき、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来た。そして見て、信じた。

ヨハネが入ってきて、それで「見て、信じた」とあります。ここの「見る」は、また違うギリシア語が使われています。エイドス(εἶδος)と言いますが、ここで「見て理解した」という意味が使われています。ヨハネは、ここでようやくイエス様が、よみがえられたのだということを理解し、信じました。

「見て、知って、信じる」というところでしょうか。見ているものの背後に、神が何を語っておられるかの理解が与えられるのです。英語だと分かり易いですが、見ているものは、sight といいます。視覚で見ているものです。けれども、それ以上に見ているものから、神が何をを見せているのか、その霊的な部分を知ることが必要ですね。それは、insight と呼びます。insight は、sight の中に、という言葉になっていますね。見えているものの中にあるもの、洞察です。

私たちの信仰は、この目に見えないものを見ることによって、成長します。神と、神の遣わされたイエスを信じるのが永遠のいのちだとイエス様が言われましたが、そのいのちを、ヨハネはこのように第一の手紙で、冒頭で語っています。「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」ヨ

ハネは、イエス様をこのようにして見つめていました。聞いて、見て、見つめて、自分の手でさわった(これは、私たちにはできないことですが)、ということです。私たちは、見ているものから、その中にある真理、イエスご自身を見ることが出来る力が与えられるよう祈りましょう。

<sup>9</sup> 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかった。<sup>10</sup> それで、弟子たちは再び自分たちのところに帰って行った。

イエスが、死人からよみがえるということが聖書にあるということですが、これは旧約聖書です。死んでも、その死に勝利することを指し示す御言葉は数多くあります。キリストについての初めての預言、創世記 3 章 15 節は、女の子孫が蛇の子孫のかしらを打ち砕きます。かかとを蛇は噛みつきませんが、彼は蛇のかしらを打つのです。創世記 22 章では、アブラハムがイサクと共にモリヤ山に上りましたが、その三日の間、彼はイサクを自分が屠ったとしても、神は彼を必ずよみがえらせると信じていました(ヘブル 11:17-19)。そしてモーセ率いるイスラエルの民が、紅海を渡る時、水の中を通りましたが、そこから出てきて、エジプト軍は滅びました。それは、「イエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型」とあります( I ペテ 3:21)。そして、詩篇 16 篇 10 節です、「あなたは私のたましいをよみに捨て置かずあなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならないからです。」

その他にも、数多くの復活を暗示する箇所はあります。このことについての理解がありませんでした。イエス様は、弟子たちにはご自分がよみがえることを何度となく語られましたが、聖書にそれが書いてあることについて、彼らは理解できていませんでした。

### **3A イエスにしがみつくマリア 11-18**

<sup>11</sup> 一方、マリアは墓の外にたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。

ペテロとヨハネは、自分たちのところに帰って行きましたが、マグダラのマリアが逆に墓に戻ってきて、墓のところでたたずんでいます。彼女にはイエス様は全てであり、この方から離れるのは全くあり得ない話であり、彼女はいわばここで、寝ずの番をしています。仏教的に「通夜」です。彼女が泣いているのは、彼女は、誰かが主の体を取って行ったと思ったからです。ご遺体の近くにいたかったのに、その体を誰かが持っていたことで、非常に悲しんでいるのです。

これまで墓の外にいましたが、ここでようやく、墓の中をのぞき込みました。

<sup>12</sup> すると、白い衣を着た二人の御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、一人は頭のところに、一人は足のところに座っているのが見えた。<sup>13</sup> 彼らはマリアに言った。「女の方、なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに主を置いたのか、

私には分かりません。」

ペテロとヨハネが来ている時には、いなかった御使いがここにあります。そして、イエス様に仕えていただろうことがよく分かります、頭のほうと、足のところにそれぞれ座っています。驚くのは、マリアが御使いの存在に驚いていないことです。女たちが先にやってきた時に、御使いを見て恐ろしくなりましたが、そういったことがマリアには眼中になかったのです。それだけ、主ご自身のことで頭がいっぱいであり、他の御使いとの出会いとか、イエス様の代わりにはならなかったのです。

ここで思い出します。主が天幕の中でモーセと顔と顔を合わせて語られている時に、金の子牛のことで、主はご自身が行かないで、主の使いを遣わすことを語っておられました。けれども、モーセはこのように要求しています。「出 33:15 モーセは言った。「もしあなたのご臨在がともに行かないのなら、私たちをここから導き上らないでください。」主の臨在がなくて、約束の地に入ったところで、どうなるのですか？ということ。主が共におられるということ、その臨在を私たちはどれほど、恋い慕っているでしょうか？

<sup>14</sup> 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。そして、イエスが立っておられるのを見たが、それがイエスであることが分からなかった。

彼女は気配を感じたのでしょうか、そこに、復活のイエス様が立っておられました。しかし、なんと彼女は気づくことができません。涙で目が曇っていたのでしょうか？それとも、喪失感できちんと確かめることができなかったのでしょうか？霊的に見えなくなっていたのでしょうか？私は、イエス様の復活の記述を読むに、イエス様のお姿があまりにも大きく変わっていたからではないか？と思われる。エマオの途上に行く二人の弟子も、一緒に歩いていた人がイエス様であると分かりませんでした。主が共に宿泊されて、パンを裂いたところで、そこでようやく主だと気付いたのです。その時も、お姿がかなり変わっていたのではないかと想像します。

<sup>15</sup> イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、彼が園の管理人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。」

イエス様は、御使いと同じ質問をされています。「なぜ泣いているのですか。」それで、イエス様だと気付けばよいのですが、そうではなく、園の管理人だと思いました。なので、自分が引き取るということを話して、話を切っています。また、墓のほうに向き直したかもしれません。彼女が全く気付いていません。主が共におられるのに、気づかないということがありますね。自分の感情でいっぱいになって、見えるものが見えなくなる。生きている主が見えなくなる場合があります。

<sup>16</sup> イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、ヘブル語で「ラボニ」、すなわち「先生」とイエスに言った。

彼女は気づきました。「マリア」と呼ばれたからです。たったこれだけのことで、彼女はラボニ！と叫んで、イエス様にしがみつきます。瞬時に彼女はイエス様であることを察知します。そうです、彼女はそれだけイエス様との親しさを持っていたのです。エマオの途上に歩いて二人の弟子たちが、イエス様に気づいたのも、イエス様がパンを裂いた、という親しみがあったからこそ、イエス様であると気づいたのです。イエス・キリストを知るといことは、こういうことです。救われるというのは、こういうことです。「ヨハ 10:3-4 門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。」何か理論的な言葉を聞いて、知的に理解することではありません。イエス様のそばにいて、この方を親しく知るところに、救いがあり、永遠の命があります。

<sup>17</sup> イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

イエス様はここで、意味深々なことを告げられます。「すがりついてはいけません」と言われています。マリヤは、絶対にイエス様から離れないとして、固くつかんで離さなかったのでしょうか。けれども、そのままではいけないのだとイエス様は言われるのです。

「わたしはまだ父のもとに上っていないのです。」と言われます。イエス様は最後の晩餐の時から、何度となく言われていました。このことをまだ果たしていないから、だから、わたしがいつまでも地上にいるようにしてしがみついてはいけない、と言われています。イエス様は、四十日間、地上にこのままおられて神の国について弟子たちに語られます。それから天に昇られます。オリブ山から昇られました。そして、天において神の御座の右に着座しておられます。そして戻って来られるのですが、それはまだ起こっていません。

しかし、よみがえられてから 50 日後に、すなわち天に昇られてから 10 日後に、聖霊が弟子たちに降るのです。そして聖霊によって、イエス様はご自身が彼らと共におられると約束しておられました。「16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」今、マリヤがイエス様に親しみをもって近づいている、その結びつき以上のことが、実はイエス様が物理的におられなくなった後の方で、起こるということです。もうひとりの助け主である聖霊が、私たちと共におられ、また内に住んでく

ださるので、物理的にイエス様がおられる以上に、靈的にこの方を親しく知ることができるということなのです。

そして、「わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る」と言われます。これも驚くべき発言です。イエス様は、彼らにとって主であります。しかし、今、兄弟と言ってくださっています。なぜなら、イエス様と父なる神の間にあるその交わりの中に、彼らも招き入れられたからです。「ロマ 8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」私たちが、キリストによって神の家族に招き入れられて、キリストが長子になってくださり、私たちは神の養子となることができたのです。

<sup>18</sup> マグダラのマリアは行って、弟子たちに「私は主を見ました」と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。

こうして、マリアは主を見ました。ここの「見る」は、エイドスです。つまり、理解して見るということです。マリアもついに、墓に遺体がないということが、取られた、ということではなく、よみがえられたのだということが分かりました。そして、主にこれらのことを話したと有体に伝えました。こうやって、彼女が復活の第一目撃者になりました。私たちは、「見て、信じる」ようになれば、自ずとその心の変化を人々に話したいと願うでしょう。自分の愛している人、知り合いの人、大事にしている人には、伝えたいと願います。